

令和2年度 富山大学大学院
生命融合科学教育部 F D 研修会報告書

令和2年12月8日（火）



大学院生命融合科学教育部

目 次

巻頭言

1. 実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3. 講演資料
講師：豊岡尚樹 学術研究部（工学系）・教授
学長補佐（大学院教育、大学院改革担当）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
4. 全体討議まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
5. アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

※令和2年度大学院生命融合科学教育部FD研修会は
大学院医学薬学教育部との共催にて開催。

生命融合科学教育部 令和2年度 FD 報告書 巻頭言

本年度は生命融合科学教育部、医学部および和漢医薬学総合研究所の教員による合同FD研修会を12月8日に開催致しました。現在、富山大学では、杉谷の医薬系大学院の再編、五福の理工系の再編、医薬系と理工系の緊密な関係による研究科関係課程の設置など、新しい形の大学院の実現に向けて検討が行われております。一方、現在文科省は、大学を含む高等教育機関の改革を進め、教育の質保証および研究力の向上等を要請しており、達成できない大学は撤退もあり得るとしてしております。また、地方の国立大学は、地方創生やイノベーションハブとしての役割も期待されております。このような状況下で、我々は富山大学でどのような大学院を作り上げていくかということが本FDのメインテーマであり、今後、新たな大学院組織に所属する生命融合科学教育部、医学部および和漢医薬学総合研究所の教員が連携してこの課題に対処しようというものです。そこで本FDでは、検討が進められている「新大学院構想」について課題を共有するため、本教育部教務委員長の一條裕之先生にコーディネーターを、また、学長補佐（大学院教育、大学院改革担当）の豊岡尚樹先生にご講演をお願いし、新大学院構想の検討状況などについて話題を提供して頂き、その後全体でディスカッションを行いました。

ディスカッションでは、企業との連携等、新大学院のKPIになりそうなアイデアが得られ、直後に生命融合科学教育部内でワーキンググループが発足して活動を開始しております。本教育部では、融合的な教育を推進することを目標としておりますが、我々が大学院教育を通じて社会にどう貢献できるのかについて考えさせられたFDでした。本年度FDが、大学院の使命に向けた本教育部改革および新大学院創生の端緒になることを願っております。

最後に大変お忙しい中、ご出席頂いた先生方ならびに今回のFDを企画して頂いた一條先生にあらためてお礼申し上げます。

2020年12月

大学院生命融合科学教育部長 西条 寿夫

1. 実施要項

令和2年度生命融合科学教育部FD研修会実施要項

日時：令和2年12月8日（火）17時-18時30分

会場：杉谷キャンパス・医薬イノベーションセンター1階・日医工オーディトリウム
ZOOM 配信併用（オンライン参加可能）

テーマ：「富山大学大学院改革の方向」

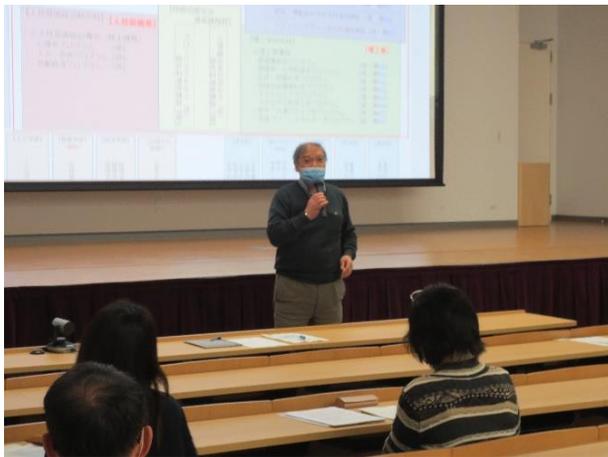
内容

- 1) 開会挨拶（西条教育部長）
- 2) 講演 講師：豊岡尚樹 学術研究部（工学系）・教授
学長補佐（大学院教育、大学院改革）
- 3) 全体討議（司会：一條教務委員長）
- 4) 閉会挨拶（井川副教育部長）

企画趣旨

生命融合科学教育部は学際的なフロンティア組織として大学院教育を行ってきた。現在進行している大学院の組織改革の方向性について、豊岡学長補佐に情報を提供して頂き、これからの学際的な大学院教育について議論を深める。

（教務委員会委員長 一條 裕之）



2. 参加者名簿

個人情報により省略

3. 講演資料

学内資料により省略

4. 全体討議まとめ

本学では、全学的大学院改組に向けて検討が進められている。生命融合科学教育部は当初から改革型の学際的な教育部として先導的な役割を果たしてきた。生命融合科学教育部の構成員である豊岡教授が学長補佐として大学院改革の立案の中心であることは、私達の教育部としても象徴的なことである。今回のFDには他の教育部（医学薬学教育部（医学））と和漢医薬学総合研究所の参加もあり、生命融合FDが多方面に貢献することができ、喜ばしかった。

FDをきっかけとした大学院教育の具体的な改良は、生命融合科学教育部においては当たり前のように行われてきた。昨年はFDをきっかけとして、生命融合科学教育部のホームページの改良が実現した。本年のFDでは豊岡教授の説明を基に、富山大学大学院改革の方向を議論した。文部科学省との交渉過程にも触れながら、議論の道筋を順次示され、具体的な組織が立案されていく様子を詳しく示された。その要点は、大学院組織を人社芸術系（修士課程）、医薬系（修士・博士課程）、理工系（修士・博士課程）に大きく分類し、学際的な組織として、文理融合系（修士課程）と医薬理工融合系（修士・博士課程）を橋渡し組織として準備することにあつた。教員は、専門のたこつぼ的に1つの組織に閉じこもるのではなく、組織の間を柔軟に動く体制の設計が示された。組織構築に至るまでの過程を知ることができたのは、意義深いものであつた。交渉の中で、「医薬と理工の連携を進める」融合系が設計され、大学院が学部学科の延長として縦割り化してしまうことを乗り越える方策とされた。これは生命融合科学教育部の機能の発展と理解でき、これまで生命融合科学教育部で努力してきた多くの教員にとって心強いことである。入学定員などが今後の調整の課題となると思われる。

他教育部がどの様に議論を進展させ、それぞれの教育体制の改良に生かすかは、ここでは不明であるが、生命融合科学の所属教員には強いインパクトを及ぼしたことは確かである。その証拠として、FD直後から教員間で自然発生的に活発な議論が巻き起こり、一週間ほどの間に、カリキュラムの改良に向けた問題提起と、発案がおこなわれた。そこでは大学院と企業を中心に問題提起が行われた。企業との関係は昨年のFDから持続的に議論されてきたテーマであつた。以下の一節は昨年のFD報告書の抜粋である。

「大学が企業に所属する者を対象としたPh.Dコースを準備し、大学と企業の共同研究の場として設定することが考えられる。例えば、ドイツのインターンシップの事例のように、Ph.Dコースの学生が企業で一定期間の研究を行うプログラムを作ることで、大学が連携する企業との関係を促進することができる。大学院生の学費のバックアップがあれ

ば、大学院生が増えると期待される。大学が予算を割くことができればよいが、この他に企業からの資金援助を引き出す工夫があればさらに良いだろう。」

今回のFDの直後に、企業と大学院に関わるカリキュラムを改良する議論が発展し、教育部長・教育副部長が主導するワーキンググループが発足したことは特筆に値する。現在進行中のワーキンググループの活動の詳細をここでは述べることはできないが、近い将来に生命融合科学教育部が、先導的な役割を果たして、現状の大学院のカリキュラム改良につなげ、改組される新大学院におけるスタンダードとなるモデルが提示されるに違いない。この様なフットワークの軽さと合理的で戦略的な活動は、これまでの生命融合科学教育部の活動を受け継いでいることを強く意識させられたFDであった。

(教務委員長 一條 裕之)

5. アンケート結果

(1) 生命融合科学教育部担当教員対象

アンケート回答総数 14人

出席者総数 26人

1 2020-12-8の生命融合科学教育部のFD研修会に参加して

1. 有意義と感じた	10
2. あまり有意義と感じなかった	0
3. わからない	2

2 今後のFD研修会で課題としたい事項があれば、お書きください。

- 会場とオンラインの音声
- 学生への改組の意義、内容等の説明、アピールの仕方
- 学生のリクルート

3 生命融合科学教育部が行ってきた以下の事項で、今後、充実していくための具体的方策があればお書きください。

(1) 共通科目（先端生命科学特論・生命倫理特論）	4	
(2) 異分野基礎実験体験演習	4	• 修士におけるPME実習の取り組みも参考に医薬理工をまたく、産学をまたく実習を進めるとよいと考えます。（医薬理工、産学連携教育、シーズ共同開発など）
(3) 外部講師による特別演習セミナー	3	
(4) シンポジウム	2	
(5) HPの活用	3	• 英語版で海外へアピールを！
(6) テキスト(教員の研究概要)	1	• 共著，出版考えるとよいと思います。
(7) 学生主体の研究発表会	3	
(8) 他領域の副指導教員制度	4	• 進学が想定される学生に対して、学部を越えた卒論指導ができるようにする仕組みがあるとよい。 • 本日の修士課程学生の充足の問題にも関わってきますが、五福キャンパスの学生にもっと杉谷の研究室が身近になる方策が必要と考えます。五福の学部の科目に入り込む、とか、一般教養科目を行うなど、が思いつきます。（すでにやっているかもしれませんが…）
(9) 障害学生の受入れ対策	0	
(10) 英語による授業	3	• 教員の専門的英語力を伸ばす海外研修などがあると良いのでは…
(11) その他	0	

4 2020-12-8の生命融合科学教育部のFD研修会に参加して、提案されたいことやお感じになられたことを自由にお書きください。

- ぜひ医薬理工の学生（学部・修士）の進学希望をアンケート調査し、教員にもフィードバックをお願いします。先生方のモチベーションupにもなると思います。また同時に地元や全国区の企業アンケート（本構想への期待）を取るなどして対文科省とともに、先生方の進路の参考になるようフィードバックされて欲しく思います。
- 大学院改組の経緯は分かったが、決まってないことが多くてなんとも言えない。
- 学生の内部進学および外部からの進学について考える必要がある。

(2) 医学薬学教育部担当教員等対象

アンケート回答総数 20人

出席者総数 45人

1 2020-12-8の生命融合科学教育部のFD研修会に参加して

1. 有意義と感じた	14
2. あまり有意義と感じなかった	2
3. わからない	3

2 今後のFD研修会で課題としたい事項があれば、お書きください。

- どうやって関係、融合していくか。
- (今日の内容を踏まえて)各学部、各学科における大学院改革の課題・方向性をそれぞれで検討し、開示してほしい。
- はじめの30分は音声聞き取れず、チャットで何人も意見を述べているのに対応が遅かった。事前にリハーサルはされていたのでしょうか？
- 冒頭、ほとんど聞こえない状態が続きました。チャットで指摘がなくても、会場でオンタイムで確認できないものなのでしょうか。

3 2020-12-8の生命融合科学教育部のFD研修会に参加して、提案されたいことやお感じになられたことを自由にお書きください。

- 大学院改革へのご尽力ご苦労様でございます。私が気になるのは富山大学の今後の方向性です。地方大学ですので、地元との関係性が気になります。県の行政、企業、市民との関係構築はどのようになるのでしょうか。私見としては地元の誇りとなるような大学像を目指して欲しいと思っています。富山県は昔から教育県でハイレベルの高校生が多くいます。富山大学が教育県富山にふさわしい最高学府となり、県民が誇りに思える大学を目指して欲しいと思います。そのために大学院は行政、企業、都市計画において連携して存在感を示せればと思います。
- マイクのトラブルがあったが、前もって資料を送信および配布されていたので、多少補完できたのではないかと思います。実際に文科省とどのようなやりとりを行って、どのように変化して今の案になったのかが、私なりに理解できて、今回のFDはとても有意義でした。
- 学部の学生さんが大学院に進学するにあたって異分野の大学院プログラムにも進学しやすくするために学部の間にも異分野に触れる機会が必要と感じました。(特に3年生、4年生など)
- 結局、学生の就職活動支援の具体的な方策がないとよっぽど決意の固い人か、何も先を考えていない人しか入ってこないと思います。(私が学生の頃は多くの人々がどのような研究室で何をすればどんな所行けるのか考えて研究室を決めていました。)「決意の固い人以外は必要ない」と言っている状況でもないように感じました。また、とにかく何をするかわからない所は不安で入れないのでシンプルで具体的にしなければならぬと思います。(シンプルにはなっていると思います。)
- 講師の音声がかたかく聞き取りにくく、ストレスだった。自分で資料を見れば十分理解できる内容であり、+αの情報等が欲しかった。
- 進捗があれば、今後もこのような機会を設けていただけると有難いです。